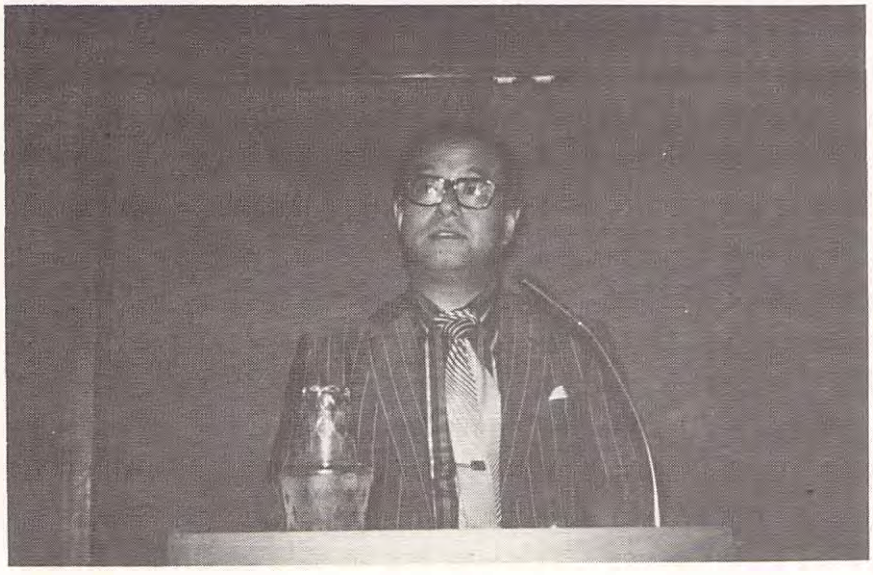
研究会講演録

華国鋒体制の分析

中嶋嶺雄東京外国語大学教授

本稿は，去る6月15日，当研究所が主催した第4回定例研究会における中嶋嶺雄東京外国語大学教授の講演録である。先生の貴重な御講演を今後の参考の資とすべく，読者各位に御紹介する次第である。



1. 中国内政を見る目

講師　中嶋嶺雄氏

北京政変後の中国がどうなっているか，特に華国鋒政権，あるいは華国鋒体制というものの安定度はいかなるものであるかということが本日の私に課せられたテーマだろうと思います。

昨日もある新聞によりますと，中国はこの夏に党大会を開くのではないか。それと前後して中央委員会総会を開くのではないか。あるいはこの秋には全国人民代表大会を開催することによって名実ともに華国鋒体制というものを確立するんだというような報道がなされております。ここ1，2カ月そのような見方がかなりございまして，私は5月初旬に香港に行ってきましたが，香港大公報 ― ご承知のようにこれは中国系の新聞でございますけれども ― の非彝民社長などもそのようなことを言っております。おそらくこれは華国

鋒政権というもののスケジュールだろうと思いますが，そのスケジュールがほぼその通り実現した暁には実は私どもはこの問題をもう一度論じなければいけないわけでございまして，果たしてそういうスケジュール通りに中国の政治プログラムが進行するかという問題もございます。そしてかりにそのようなスケジュールがプログラム通りに進行いたしましたとしても，これまでの中国共産党の近い過去における状況というものを振り返ってみると，たとえば文化大革命直後の九全大会，あの九全大会は1956年の八全大会以来なんと13年ぶりで，しかも文化大革命という非常に大きな激動を経過して開かれたわけであります。そこではいわゆる毛林体制が燦然と確立したかに見えたわけでございますけれども，その体制確立そのものも次の崩壊を内包していたわけでございまして，やがて林彪事件を経なければいけなかったわけでございます。林彪事件が一応処断された直後に開かれたのが73年夏の十全大会でございました。この十全大会はいわば文革と脱文革の角逐の中で開かれたというふうに見ていいわけでございますけれども，ある種の妥協が成立した上で，ともかく表面的には反潮流というような文革ラディカルがそこに地位を占めまして，王洪文が党副主席としてさっそうと登場したわけでございます。もとよりこの十全大会は王洪文の党規約改正報告と周恩来の報告との間にも，当時私も指摘しましたように，非常に大きなトーンの食違いがございまして，そこに問題がすでに明らかであったわけでございます。しかしながら，十全大会によって中国はまさに老中青の三結合を実現し，王洪文こそ文化大革命を代表し，新しい中国の精神，新しく生まれ出たもの，つまり新生事物を体現するリーダーであるとされ，盛んにクローズアップされました。その十全大会そのものも，大会による新しい人事の確定そのものが次の崩壊をはらんでいたわけでございます。

そうしますと，一部の新聞が言いますように，華国鋒体制というものがそれなりの政治的儀式を行えばそれによって華国鋒体制が安定したというふうには言えないわけでございまして，問題は果たして今日の中国がこれまでの中国内部に存在したある種の政治的悪循環を本質的に断ち切っているかどうかというところにかかっているわけでございます。この点がなくして，いかに大会がキャンペーンとして行われていましても，十全大会，そしてその前の九全大会が示したごとく，それは当面もしかすると華国鋒体制というものを印象づける，そしてクローズアップさせるかもしれませんけれども，それはやがて次の分裂なり崩壊をもたらす端緒にならざるを得ないわけでございます。こういうふうに見ますと，私が申し上げましたように，中国のリーダー・シップそのものがそういう悪循環から本質的に解き放たれたのかどうかということをまず見て行かなければなりません。ここに私どもの一つのポイントがあるわけでございます。

2. 不安定な華国鋒体制

さてその辺を見る場合には，これまでの少なくとも北京政変をはさむ昨年来の中国の政治の動きというものを振り返ってみる必要があろうかと思います。そこでそういう政治的な歩みを振り返ってみたいと思いますが，その前に，現時点においてそれでは華国鋒体制というものがそういう安定性を見通すことができるかどうかということに触れてみたいと思います。つまり私の今までのプレゼンテーションは，かりに11全大会というものが開かれ，そこで大々的に華国鋒支持のキャンペーンが行われたとしても，果たしてそれで中国が華国鋒体制を固めたことになるのかどうかということについてはまだまだ疑わしいという前提であるわけですが，そのことはさておきまして，当面の現在の状況というものをここで考えてみたいと思います。

私が現在まだまだ華国鋒体制が安定したというようなことを言い得るいかなるインディケーションを一つも発見できないのは，一部の報道などにもかかわらず，やはりそれを証明するに足る材料というものがほとんど欠如しているからでございます。まずあれほど重要な政変が起ったにもかかわらず，今日に至るまで華国鋒体制はいかなる制度的，政治的認知をも受けていないということなのです。これがまず一番重要な点ではないでしょうか。つまりあれほど大きな変化が起り，そしてまた4人組打倒，4人組打倒という澎湃たるキャンペーンが真底から行われているのであれば，その流れに沿って少なくとも中央委員会ぐらいはもう開かれていなければいけない。にもかかわらず，あれほどの政変がありながらこの8カ月すでに全くそういう組織的，制度的空白のままで今日に至っているわけでございます。中央委員会，あるいは党大会というものももちろん開かれておりませんし，全国人民代表大会などもその気配もございませんけれども，こういう状況でございますと，現在の中国の最高政策決定機構，機関であるところの党中央政治局常務委員会というものを見てみましても，ご承知のように9名存在した政治局常務委員会の中で現在残っているのは華国鋒と葉剣英，その2人だけでございまして，肝心のポリト・ビューローの人事的な補填もできていないわけでございます。そして言うまでもなく国務院その他のいわゆる閣僚級のところも穴があいたままになっております。なぜそのことができないのか。ここに一つの着眼点があることは当然だと思います。

それから2番目の点は，華国鋒はそういう形で制度的にも組織的にも何らの認知を得ていない。つまり自分でクーデターを行って，自分で権力を握って，そして相手が悪いと非常に口ぎたないののしりの言葉を連日のごとくはいているというのが現状でございます。そういう状況であるにもかかわらず，他方では，これも皆さんすでにご承知のように，今

日の華国鋒は権力のシステムの上からいいますと毛沢東も，周恩来も，そしてまた今回ポドゴルヌイを失脚させたブレジネフでさえもまだそれだけのものを握ったことのない，党，政，軍の三権を全部彼一人が依然として掌握しているということであります。ご承知のように，華国鋒は去年の10月７日にクーデターを起こしました。そしてそのクーデターが起った同じ日に党中央主席兼党中央軍事委員会主席という二つの権力を手にしたわけでございます。このことは，あの政変がたしか12日のデイリー・テレグラフなどをはじめとして日本にも伝わったわけですが，しばらくはこの10月７日というまさにその時期に華国鋒が権力を奪取したんだということは報じられなかった訳です。その後10月20日ごろ人民日報の社説の中でさりげなくその事実が伝えられました。ですからあまり新聞などでもそのことは報じられませんでしたけれども，まさに華国鋒は10月７日に４人組を打倒して初めて彼が権力につくことができたということは歴然としているわけでございます。そして同時に彼は，去年の天安門事件以降国務院の首相でありましたから，こういうふうに党，政，軍の三つの権力を一手に握っているわけであります。それが果たして華国鋒の政治的安定度によってそうなっているのか，あるいは中国のリーダー・シップの中で華国鋒にそれだけのすべての権力を供与するという合議の上でそうなっているのか，私にはそう思われないわけでございまして，これはまさに華国鋒があのような形でいわばクーデターを実現して，もうすべての権力というものを少なくとも自分で成し得る範囲におきましてとにかく必死になって握りしめていて，その権力のいわば分散なり，そういうある種の集団的なシステムというものをとることさえできないほど，華国鋒はある意味での不安の中で日を送っていなければならない情況にあるのではないか。従って，自分があのとき非常に異常な形で手にしたものを全部今彼が握っているという，社会主義の歴史にも例を見ない状況が今日依然として存在しているわけでございます。

この二つの常識的な問題を考えただけでも，華国鋒体制というものが現在果たして安定しているかどうかということについては，幾つかの留保をつけなければいけないということがおわかりいただけるのではないかと思います。実は，本日の講演のテーマも華国鋒体制の分析というふうになっておりますけれども，果たして華国鋒レジーム，体制というふうに言うことができるかどうか，それさえも疑問であるというふうに考えざるを得ないわけでございます。果たして体制というほどのものができているのかどうか。もしも華国鋒レジームというものが機能しているならば，少なくともポリト・ビューローぐらいは全部埋まっていなければいけないわけでございまして，現在そのような状況にない。そのような状況にない華国鋒は，あとでお話ししますように，ますます日増しに鄧小平の影におび

えざるを得ない。これが現在のカッコ付の華国鋒体制の姿ではないかというふうな気がしております。

3. 華国鋒体制の矛盾

さてそれでは一体なぜ華国鋒はそのような不安な状況にあるのだろうか。この問題の一番根源的な問題は，何といいましてもあの北京政変そのものを華国鋒が説得的な論理によって説明し得ない。ある意味では華国鋒のレジテマシーというものが非常に疑わしいという問題がそこにあるわけでございます。これはどういう問題なのかということでございますけれども，先ほど申し上げましたように，昨年のあの10月の政変というものは今日華国鋒のクーデターであったということがますます歴然としてきております。私は当時からあれは華国鋒のクーデターであったということを申し上げてきたわけでございますが，ご承知のように中国側は4人組がクーデターを起そうとしたものを未然に防いだんだ。4人組の権力奪取の陰謀を防ぐためのいわば予防クーデターであったというような形の表現をと

ったのですが，果たしてそうであったのかどうか，この問題は現在すでにかなりはっきりしてきております。結論を申し上げますと，先ほども言いましたように，どう見てもこれは華国鋒のクーデターであった。ということになりますと，これまでにも申し上げてきましたように，文化大革命なり批林批孔運動などの経過を通じて，いわゆる文革ラディカルの人たちは毛沢東側近として政治を私視し，政治を恣意的に運営してきた。ですから大状況においてはまさに4人組は指弾さるべきであったにもかかわらず，しかしながら毛沢東死後まだ喪もあけない服喪期間にあるといういわば極限的な状況においてルール違反をやったのは明らかに華国鋒の方であって，4人組ではなかったということが徐々に明らかになってきているわけでございます。4人組は確かにいわば政治を私視し，そして大衆の間の怨嗟の的になっていただけに，4人組を打倒するときの下手人として大衆は華国鋒を拍手喝采し，英雄化いたしました。しかしながら，やがて時間がたつにつれて，一体華国鋒のやり方はそれでよかったのかどうかという，その手続上の問題をめぐっていろいろな疑義が出てきているわけでございます。そのような疑義が一番多く出ているのは言うまでもなく青年層の間からでございまして，これは表にはほとんど出ておりませんけれども，こういうような批判がすでに華国鋒に対しても存在してきております。つまり華国鋒は一方で毛沢東をたたえ，毛沢東思想を継承するとうたいながら，なぜ華国鋒は毛沢東の教え通りに4人組を批判しなかったのか。毛沢東は批判団結批判ということを言い，あるいは闘争批判改革ということを言ってきたわけでありまして，それこそが毛沢東のいわば政治批判なり権力批判のやり方ではなかったか。にもかかわらず，あのような華国鋒のやり方は毛沢東の教えに背くのではないか。そしてついこの間までご承知のように中国の最も正統的な政治の体現者であった人々を一挙に反革命，陰謀家という，いわば不当性といいましょうか，その理不尽に対していろいろな批判が出てきている。それから一方では最近新4人組と言われるように，その後のもしも華国鋒レジームというものがあるとするならば，それらの人たちのある種の妥協的な連合だと思いますけれども，華国鋒，汪東興，あるいは陳錫聯などが，そして葉剣英もそこに入るわけでございます。彼らを新4人組というような批判も一部に出ているわけでございまして，これらの問題を今華国鋒氏自身が問われているわけでございます。

4. 北京政変をもたらしたもの ――激動の1976年

そこでその問題はなんといっても重要なところでございますし，華国鋒体制の分析の一番根本になりますので，私の率直な見方を述べさせていただきたいと思いますが，それにはやはりどうしても過去1年ぐらいの政治の動きをざっと振り返ってみる必要があろうかと思います。あるいは皆さん方にはすでによくご承知のことだと思いますけれども，ちょ

っとそのためのお時間を貸していただきたいと思いますが，去年の１月８日に周恩来総理がなくなりました。そして周恩来総理の葬儀が行われたのが１月の15日であります。そしてその葬儀に全中国を代表し，中国民衆を代表してただ一人弔辞を読んだのが鄧小平でございます。その鄧小平は１月15日以来今日に至るまで公衆の面前から姿を消しているわけですが，その彼の弔辞は非常にある意味では挑発的でもあるし，また，いかにも鄧小平らしい弔辞でございました。当時の中国で枕言葉のように言わなければいけない文化大革命の勝利であるとか，文革の新生事物というようなことにはほとんど触れずに，そして周恩来の経歴についてもその前半生については非常に詳しく触れながら，文革以降の周恩来の肝心のところについてはほとんど触れずに，最後に彼が言ったことは，中国社会を工業化し，近代化するために粉骨砕身しようではないかということを言いましてその弔辞を結んでいるわけです。このようなニュアンスで今日言われている「４つの現代化」路線を自分は継承しますということを周恩来の前で誓って彼を葬送しているわけでございます。そのときにすぐ演壇の横に並んでいたいわゆる毛沢東側近の人たち，これは華国鋒をも含む文革派の人たちと言ってもいいでしょう。非常にいら立ったことは言うまでもございません。10年かかって文化大革命をやり，これほど毎日階級闘争を鼓吹し，そして批林批孔運動から当時は水滸伝批判ということを展開していたにもかかわらず，結局鄧小平がそこまで台頭してきた。そしてそのような鄧小平の台頭はまさに中国社会のいわゆる深部の力と申しましょうか，社会の潮流に彼らがそれなりに立脚していたがゆえにそこまで再び台頭してきたわけでございます。そういう状況を一方に目撃しながら，党中央の人たちは何とかして鄧小平の総理就任を阻止しようとしたわけです。ご承知のように当時は内外とも鄧小平が周恩来のあとを継承するのではないかというふうに言われていたわけでございます。そういう状況の中で１月下旬から２月初めに開かれたと思われる党中央の会議では，とにかく鄧小平の総理昇格を阻止することができた。そして２月７日の日に清華大学でいわゆる走資派批判の幕が切って落されたわけでございます。その翌日全世界は，華国鋒という耳なれない人物の名前を聞いて唖然としたわけです。私はたまたまモスクワ空港におり立った日でして，科学アカデミーの友人が開口一番，今このニュースをあなたはどう思うかと言われたことを思い出しますけれども，まさに鄧小平を打倒するための走資派批判のキャンペーンの勃発と華国鋒の政治的台頭というものが，いわば華国鋒・鄧小平関係の第一ラウンドとしてそこに表に出たわけでございます。この事実がやがて華国鋒が鄧小平の影におびえざるを得ないという，そういう両者の間のいわば政治構造の出発点に当面はなると考えていいわけでございます。やがて走資派批判のキャンペーンが吹きあれました。清華大

などの大学キャンパス，あるいは当時盛んに大慶油田とか，大寨あたりでも走資派批判が吹きあれているということが報じられました。私は決してそう思っていませんでしたが，中国はまさに走資派批判のキャンペーンの中で文革の新生事物を次々に定着させつつあるんだという報道がなされていたのが去年の春でございます。一方，これも当時からわれわれ気がついていたことでございますが，周恩来の死に対して党中央がほとんど追悼することがなかった。人民日報などは各国からの公式の弔電を載せただけで，正規の宰相の死にもかかわらず何ら弔意を表さなかったし，そしてまた周恩来の事績を追悼するような論文も全く掲げなかったわけです。今日では全く状況が逆転しておりますけれども，確かにそういう状況があったわけでございます。このことはやがて走資派批判というものが単に鄧小平批判を意味するのみならず，周恩来批判をも意味することに気づいてきた中国民衆を非常にある意味でいら立たせたのではないか。その結果，清明節を期してとにかく自分たちのやむにやまれぬ気持を表現しようではないかというふうに北京の市民たちは考えた。ご承知のように天安門事件というのは4月4日の清明節に起っているわけですけれども，単に北京だけではなくて，各地で同じようなことが起ったわけでございます。そしてこの清明節の4月4日の午前10時15分ぐらい，これが事件のクライマックスだと思いますけれども，天安門前の路上に大きく掲げられている毛沢東の写真と同じ大きさの周恩来の写真を，民衆を隔てて人民英雄記念碑の頂上に北京の市民たちが掲げたわけです。この毛沢東の写真と周恩来の写真を同じ高さにおいて，同じ大きさにおいて民衆を間にはさんで対峙させたというこの時間こそ，いわば中国近代史上特筆すべきと思われる天安門事件のある一つのクライマックスであったと思います。それはある意味で中国の民衆が初めて毛沢東の中国に対して，もう一つの中国があり得るんだということを意思表示し，選択したことであります。つまり周恩来の中国としてそれを表現したわけであり，そして中国の民衆は非常にこのウィットに富む政治的なプレーを行いまして，赤い小瓶を周恩来の写真につるしたと言われております。赤い小瓶は中国語でもシャオピンですし，鄧小平のことをシャオピンと呼ぶわけですが，そういう状況がとにかくあった。本来それでもって一つのデモンストレーションとして清明節は終わるはずだったんですが，ご承知のようにそのことにいら立った官権が北京衛戍区8341部隊，あるいは首都工人民兵を動員して全部花輪を撤去してしまった。これに類することは実はすでに周恩来死後の1月19日に小規模な天安門事件というのが起っているのですが，それだけにやむにやまれぬ気持で，しかも自分たちのあすの運命さえ定かでない，そこに参加したらどうなるかわからないという人たちが，初めて自発的に集まった大衆運動であった訳です。中国のような8億5,000万の国ですか

ら官製的なデモに100万人動員することぐらいはわけないですから，今までの批林批孔デモに手を上げたり，文化大革命を礼賛する場合の民衆とは違って，それに加わることが自分たちの将来をも決定する，そういうある意味で生死をかけたと思われる民衆が集まっていたわけですから，彼らは本気だったと思うんです。そこであの天安門事件になるわけです。この経過については特に私が申し上げるまでもございませんが，5日の6時15分ぐらいから，これは人民文学に非常に生々しい描写がございますが，徹底的な弾圧にかかるわけです。これは日本の機動隊なんというものじゃなくて，ほんとうに大へんな大量虐殺が行われた模様でして，これは完全に報道管制の中で起っております。ただ人民文学自身がそのことを非常に生々しく，まさに文章がすべて血ぬられているかのようなゾッとする表現でかなり具体的に書いております。多数の高級幹部の子弟が死んでいるとも言われています。それほどの大きな事件であったわけであります。

これは考えてみると，毛沢東が言う造反有理なんです。そうであるだけにこの問題が党中央に与えた衝撃というのは非常に大きかったと思います。そこで党中央は翌4月7日に急拠政治局会議を開いて鄧小平のあらゆる職務を剥奪する。つまり鄧小平問題は主体的矛盾であるとし，それを毛沢東のお墨付で，毛主席の指示によりという形で決議いたします。それからもう一つ決議がありまして，それは華国鋒を党第一副主席兼国務院の総理に昇格させるという皆さんもご承知の決議です。党第一副主席というポストは党規約にもないものですから，いかにどろなわ式に状況に驚いた党中央が決定しているかということがおわかりいただけるかと思いますが，そのときにやはり毛主席のお墨付を用いましてそういう決定をしている。つまり鄧小平・華国鋒関係の第2ラウンドがまたもや鄧小平を決定的に失脚させることによって今度は華国鋒のいわば最後的な地位の台頭というものを決定する。去年の4月7日でございます。

こういう構造を念頭に入れていただきますと，よく言われるように，近い将来鄧小平が今度は党大会を開いて復活してきて，華国鋒・鄧小平体制によって中国はますます安定するだろうなどという，そういうアスペキュレーションがいかにある意味では中国の政治，文化というようなものの，政治のスタイルの本質と乖離した見方でしかないということがおわかりいただけるのではないかと思います。

そういう経過があった上でやがて中国は毛沢東の余命いくばくもないという状況に徐々に直面いたして行きます。そしてご承知のように，そのことは党中央における毛沢東側近派の中，つまり文革派の中の新たな分裂を引き起すんです。そして華国鋒あるいは汪東興らの今日生き残っている部類は，この天安門事件が示したすさまじい大衆のエネルギー，

痛烈な毛沢東政治への批判というものに驚き，いつまでも毛沢東の側近として存在したならば，自分たちの将来も危ないという感じになって行く。いわばそのことによって毛沢東の死期が近づくとともに側近体制が分裂して行くわけでございます。ここに一つのその後の事態の発生の基盤があるわけです。ここで今私は毛沢東政治への批判と言いましたけれども，それはもうすでによく知られているように，たとえば秦始皇帝の時代は過ぎ去ったというような表現は，言うまでもなく毛沢東時代よ去らば去れということなんです。それから幾つか詩を紹介しましたけれども，私の教え子の北京大使館にいる者などが必死になって書いてきたメモを見ますと，これは中国文化のルネッサンスと思われるような状況が花咲きます。その中では，今でこそ華国鋒は江青夫人などを盛んに批判しておりますけれども，すでに天安門事件において華国鋒よりももっと前に彼らは毛沢東政治なり江青を批判して，そしてそのとき彼らは逆賊と言われたわけです。そして逆賊と言った人物は華国鋒であったわけです。そこにも華国鋒の矛盾した地位があるような気がいたします。「冷眼蓬雀翻妖風熱血一腔染江流」非常にみだらな雀たちが，つまり口ばしの黄色い観念的な頭でっかちなイデオログーがさかしまな風を翻すのをわれわれは冷たく見ている。決して彼らに同調しない。心はさめているんだということです。この妖風の妖はご承知のように姚文元を指すわけですし，それに対して対句になっておりますから，もう一ぺん彼らを打倒しようという，あるいは中国をもう一ぺん変革するんだという熱血が一挙にほとばしって揚子江を染める訳ですから，これは言うまでもなく江青をさすわけです。このような詩がたくさん出たわけです。これは中国人というのは表向きいわば毛沢東の旗を掲げ，批林批孔運動，林彪打倒と言いながら，いかに彼らは政治，社会というものを彼らのメンタリティの中で濾過して考えているかということであって，中国人の性格を知る上でこの詩があの天安門事件のときに出たということは非常に印象深いことです。こういう詩がたくさん出たわけですから，やはりそのことはかなり衝撃的なことだったと思います。

そういう状況はすでに８月の唐山大地震のときにはっきり現われております。ご承知のように天安門事件のときに逆賊を打倒したのは江青夫人が中心となった首都工人民兵です。天安門事件の反革命分子を打倒したあと，江青が市の工人民兵の間にはさまってにこにこ笑っている写真が人民日報に出ておりました。一方，本来都市民兵はまさに地震とかそういう災害活動に最も精力的に活動すべき役割をになっているにもかかわらず，唐山大地震のときには華国鋒は正規軍を動員して，民兵に救援活動を全くさせなかった。すでに８月にそういう状況がございました。

そういう状況の中で９月９日，菊の節句の重陽節に毛沢東はなくなったわけでございます。そういう状況ですからまさに毛沢東死しても中国民衆にとってはそれはときはなたれ

た死であったわけで，だれも涙を流さなかった。周恩来が死んだ時と非常に大きな対照がございましたけれども，党中央のリーダーたちにとってはそれこそ大へんなことでございました。すでに毛沢東側近体制の中でそういう内部分裂が明らかになっておりますから，やはり一番いら立ちあせったのは江青夫人たちだったと思います。ところがまず彼らにできることはプレス・キャンペーンをすることだけなんです。４人組というのは実際に生産点を握っておりませんし，軍にも拠点がほとんどなかったわけですから，結局プレス・キャンペーンをする。つまり文革型の政治指導をすることによって彼らのいわば危機を切り抜け，彼らの権力を確立し，毛沢東のあと自分たちが中心になってそれを握ろうとした。そして正確には９月９日に毛沢東がなくなりまして，12日の日から人民日報には６文字のスローガン，既定方針通りやれというのが毎日のように毛沢東語録として出る訳です。人民日報を見ていますと，たしか21日でございますけれども，それまでの黒ワクの人民日報の編集，つまり喪に服していたという黒ワクがとれるわけです。当時人民日報を握っていたのは４人組ですから，いわゆる４人組としては早く喪があけることによっていわば新しいキャンペーンを始めたいという，それだけあせっていた。ところがすでにご承知のように，この期間をめぐっては党中央でも意見の一致が見られず，うちの大学に来ている中国系の留学生なんかもそうですけれども，みんな喪章をつけておりました。北京の国務院とか役所なんかも幹部たちが喪章をつけているんですけれども，その喪章をとった人もあるし，つけている人もある。それから国旗が半旗になったわけですけれども，その半旗がまた国旗に戻ったり，また半旗に戻ったり，つまりそういう危機的な状況の中で考えられることは，少くとも服喪期間をどうするか。その喪の期間だけはいわば政治的休戦ですからその間に次の準備をせざるを得ないという状況があったわけでございます。そういう状況の中で４人組と言われる人たちは要するにプレス・キャンペーンをやったわけです。既定方針通り事を運べというやつです。また，それしか彼らには方法がなかったんです。しかしながら，毛沢東の葬儀の日に毛沢東の霊前で一致団結して，いわば毛主席のあとを継承して行くんだと言った華国鋒が，こともあろうに喪主もろとも，それから弔辞を読んだときに横で巻紙を補佐してくれた王洪文をも一網打尽にしようとは，そこまでは４人組は考えていなかったんだろうと思います。結局その極限状況においてルール違反をやったのは華国鋒である。クーデターがいつ起っているかといいますと，10月７日に起っているわけです。毛沢東が死んだのは９月９日，それから結局服喪期間について一致できなかったのですが，10月の８日まで，つまり１カ月喪に服そうということがとにかく妥協的にきまりまして，その喪に服している１カ月はいわばタイムのかかった休戦期間だと思っていたん

でしょう。その喪があける前の日に一網打尽にしてしまった。まさに華国鋒という長い間特務公安関係に長じ，そして汪東興というやはり8341部隊の司令官であり，特務公安関係を歩いてきたような人物とコンビネーションを組むことによって初めて実現できた政変だといえる。そしてその政変が実現し，そのあとは確かに4人組打倒に拍手喝采が起った。しかしながら，今まで申しましたようなことすべてをとってみますと，そこにやはり華国鋒としても政変というものを理由づける，つまり社会主義政権の理論によって論理化することができない。ここに華国鋒にとっての一番弱点があると思います。中央委員会はすぐ開けないし，まさにその問題が第一にあるような気がいたします。そしてこの問題はやがて華国鋒その人に対しても果たしてそういう人物を中国のリーダーとして安心してすべてをまかせておけることができるかどうかという問題として起ってくる。そうであればあるほど，華国鋒は一たび握った，まさにクーデターによって握ったその権力に必死になってしがみついていなければいけない。それが今日のような党，政，軍の三権を彼が握っているというような状況ではないかと思います。

5. 鄧小平の影の増幅——華国鋒の不安

そしてこの問題の第二番目は，まさに鄧小平の影におびえる華国鋒という表現をしたわけでございますが，これらの問題を見てみますと，何といっても華国鋒の経歴からしても，彼自身の歩んできた道からしても，幾つかの問題で華国鋒自身がジレンマになり矛盾の中に当面しているわけでございます。

それはまず第一には，現在の中国は路線的にはほぼ鄧小平路線を歩んできている。私近いうちにあるところで翻訳せざるを得ないんですが，鄧小平が「三株毒草」と言われたような幾つかのプログラムがございます。これは毛沢東以後の中国をいかに近代化し，工業化するかというプログラムでございます。その一番重要なのは党の工作についてのプログラムでありますけれども，これなどは「三株毒草」という形で盛んに批判されましたが，その全文を入手して見てみますと，明らかに現在の華国鋒政権がやろうとしている工業化，生産増強の近代化路線というものは，すべてこの鄧小平のいわば「三株毒草」論に依拠していると言っていいわけでございます。この間の大慶の工業会議，あるいは12月終わりの大寨農業会議というようなものも，言ってみればすべて鄧小平，あるいは周恩来路線と言っていいものです。それは華国鋒自身がいわゆる工業化とか，農業政策とか，そういう面での政策マンではないということ，つまり政策立案能力というようなことになりますと，どうしても実務派幹部に依拠せざるを得ないという本質的な弱点がございましょう。あるいは今日の中国が必要とする対外関係，外交問題においても同じことが言えると思います。

華国鋒が湖南の農民運動をやっているときの論文など，この間も東洋文庫からほこりだらけの学習という雑誌を探し出しまして訳したのですが，農村工作といっても彼自身が農村工作をやったわけではないんです。つまり農村における特務工作をやりまして，いかに農村のブルジョア的な分子を摘発するかということをやってきたわけです。そういう経歴であるだけに，現在の中国がかかえている非常に大きな歴史的な転換点をにない得る政策能力というものが華国鋒にあるかどうかということでも疑問でございます。それだけに路線的には鄧小平路線というものに妥協せざるを得ないということになりますと，これまでの華国鋒と鄧小平の政治的構造，政治的葛藤からいたしまして，たとえば鄧小平問題を全面的に取り上げるということは当然彼自身の矛盾した立場というものをクローズ・アップさせることになります。たとえば少くとも去年の4月7日の決議というものをどういうふうにするのか。片方で鄧小平を打倒しておきながら華国鋒自身が天安門事件を押え，そして彼自身がクローズ・アップしてきたあの天安門事件のときの逆賊の立場が正義の立場に今路線的にはなっているわけです。そうすると当然，華国鋒自身がお前は何であったかということを問われざるを得ないという問題がそこにあるような気がします。しかし鄧小平問題は単に昨年来の，あるいは一昨年来の鄧小平の政治的地位を云々するという問題ではなしに，今日まさに一方では毛沢東政治に対する評価をどうするかという非常に根本的な問題にも触れてきていると思います。文化大革命に三分のあやまりがあったと言っているのは，これはむしろ文化大革命の正しさは三分しかなかったということを意味するわけで，これは中国人のパラドックスからしても当然のことなんです。そういうふうに考えますと，やはり現在中国の大きな潮流というものは1957年までの大躍進政策以前の毛沢東思想なりを，それまでは認めようではないか，それ以後の毛沢東思想というものは基本的に間違っていたんではないかということを，実は鄧小平その人は言い続けてきたわけです。その問題をどう評価するかということにもつながってこざるを得ない。毛沢東選集第5巻が出ましたが，これはまさに大躍進政策前なんで，言ってみれば十大関係論を含めてそれほど問題のないところであるから今まで準備されていたものがほぼそのまま出た訳です。私は第6巻が出るまでにはかなりの時間がかかると思いますし，それまでにはまさに毛沢東思想の最も毛沢東思想らしいと言われてきた部分をどう評価するかという大きな問題をそこにはらまざるを得ない。こういう問題があるだけにこの1月末における民衆の願望としては鄧小平が復活してほしい。そういう壁新聞が出ております。そして党の中でも廖承志等々の人たちにより何回も鄧小平が間もなく復活するということを言われながら，依然としてそれが実現しないということ，これは一つには鄧小平・華国鋒間の先ほど申し上げまし

たような政治構造とともに，この問題は単に鄧小平の最近の動きをどう評価するかということを越えて，いわば中国内政の根本的評価をいかにするかという，まさにある意味では毛沢東思想の評価，すでに始まっていると思われる非毛沢東化という問題と密接にかかわってきているような気がします。そこにこの問題でなかなか結論が出し得ないという大きな状況があるのではないかと思うんです。従って華国鋒が今鄧小平の影におびえざるを得ない。

こういうことを考えてみまして，華国鋒にできることは何ができるのか。結局華国鋒にできることは，みずからが有名な指導者であるというある種の個人崇拝をかき立てることでございます。今日中国のものをごらんになると毛沢東の写真以上にあちこちに華国鋒の写真が出ている。そしてあるいは華国鋒の書いた書を毛沢東の書と並べてあちこちに普及させております。ただあの書を見ると華国鋒の字というのは非常に下手で品がない字ですから，毛沢東の達筆に比べて，文字の国の中国民衆はこんな指導者について行けるかというふうにみんな感じているんでしょうけれども，そのことを気づかないのが華国鋒の華国鋒らしいところではないかと私は思います。

それから最近では，結局自己のレジテマシーというものを論理化できないがゆえに，非常に前近代的な権力継承のパターンなんでしょうけれども，お墨付を競い合う。片方は既定方針通りやれだとすると，片方は毛主席にあなたがやれば私は安心だと言ったという例の去年の4月30日のお墨付を盛んに言う，それを最近は油絵に書いて，その油絵を複製してあちこちに配っている。つまり毛主席が華国鋒に寝床で，あなたがやれば私は安心だというふうに言っているその姿を油絵に書いて，その普及版を作ってあちこちに配っているというのが現在の状況ですが，それはやっぱり華国鋒の本質的な非常に不安定な状況を反映しているのではないでしょうか。

結局彼にできることは，そのような自己絶対化と，そしていかに4人組が悪かったかといういわば彼らに対する罪状暴露しかできない。しかしながら，この罪状暴露というものも果してどれほどの正当性を持つのか。今になって江青夫人が国民党の特務であるとか，紅色女郎であるとか，ほんとに口ぎたない言葉を連日のように使っておりますけれども，だとすればなぜ今日まで彼らを打倒できなかったのか。結局毛沢東なきあと初めて打倒できたわけですから，そこは歴然と権力闘争の影があるわけで，そのことはあの賢い中国人がわからないはずはない。従って，現在のようなパターンの4人組批判というものはやがて彼が天につばをはくことにもなると思いますし，そしてまた毛沢東思想を掲げながら毛沢東の最愛の妻であった江青をあれほどまでに罵るということは，結局毛沢東をも冒瀆し

ていることになるというような悪循環の中に今日の華国鋒というものが存在しているのではないかと私は思います。

結論的に申し上げますと，どうも今申し上げたようなことをすべて含めて，そもそも去年の10月の北京政変というものが中国政治の積年の悪循環を断ち切るどころか，そのいわば中国政治のガンの手術のために行った手段そのものが非常にそこに大きな問題を残して行くということにおいて，内政の悪循環というものを断ち切れない。現在の状況ですと，いつ華国鋒が今度はいわば俗な言葉で言えば自分の寝首をおそわれるかもしれないという不安にとらわれざるを得ないような状況が一方にある。そのような中国にとって言えば党内でも中央委員会さえも開けないような状況の中で，たとえば日本とかアメリカでそれを認知してくれるということは非常に中国にとって心強いことなんでしょう。日中平和友好条約の覇権条項締結ということをいかに現在の中国が欲しているかということの背景にも，このような問題があろうかと思います。

6. 北京と平壌

外交問題をいろいろお話ししたいことがございますけれども，時間の関係もございますので，私の問題提起を以上で終わらせていただきたいんですが，実はきょう講演の依頼を受けましたときに，一つだけ北朝鮮と中国との関係に触れてもらえないかという注文がございました。この問題，実は私よりもまさに皆さん方に教えていただかなければいけないんですが，その問題だけを一言触れさせていただきたいと思います。

正直言って実はそのことを証拠づけるような材料に非常に事欠くわけでございまして，おそらく今日の国際関係の中で一番わかりにくいのが中朝関係だろうと思います。従って私の仮説といいましょうか，基本的な見方をご披露したいと思いますが，私はこのように見ております。確かに北朝鮮は中ソ対立のはざまにあって，あるときは中国，あるときはソ連というふうに動いて参りましたけれども，結局そのような北朝鮮の動き方が，結果的に中国からも，ソ連からも信用を失っているという基本構造があろうかと思います。もちろん中国もその場の状況に応じて，あるいは中ソ関係に応じて北朝鮮に手をさしのべたり，あるいはソ連側もそのような対応をとろうかと思いますけれども，基本的にはどうも今日の北朝鮮の悲劇というものは中ソ関係を操作できると思いながら，結果的に全く逆の状況に陥っているというのが北朝鮮と中国との関係，あるいはソ連との関係の基本前提だと思います。そこで中国側がそれについて何か言っている材料があるのではないか。たとえば一昨年の4月18日から26日までの金日成の訪中のときにもそのような問題をいろいろ私も見てきたわけですし，そしてその問題についてはいろいろ異例な状況がたくさんございま

して，これは皆さんすでに十分詳しくご研究のはずでございます。たとえば感謝電の打ち方，あるいは中国の国境を通過したときの金日成の国境での電報の内容等々，いろいろ異例なことや奇妙なことがございまして，単に北京での金日成のレセプションでの発言などの中から，そして彼を迎える中国側の発言の中から中国と北朝鮮との食違いを探すことができるだけではなく，もっと形式的な問題でも鄧小平・金日成両首脳の演説のテキスト以外にいろいろ探すことができる。それほどまでに関係がぎくしゃくしているような気がいたします。その問題を語っている唯一の，そしてかなり決定的な材料は例の喬冠華の演説ではないかという気がいたします。喬冠華は，北京政変によって今は失脚しましたけれども，にもかかわらずやはり中国の基本的な北朝鮮に対する姿勢を現わしているというふうに解釈していいのではないか。と申しますのは，ご承知のように喬冠華は今日の黄華外相，あるいはもっと若手で日本にくる符浩などとともに長い間周恩来外交の実務的な担い手でございました。特に喬冠華は50年代からすでにそうであったんでありますし，ただ結局中国においては外交官ないしは外交幹部というものの地位が非常に低いんです。喬冠華でさえも平の中央委員，例の49年に毛沢東，周恩来の意を受けてスチュアート大使と極秘裡に米中接触の交渉をしていた黄華現外相，前国連大使でさえも党内の地位は非常に低い。こういう状況がございます。そこに外交官僚の一つの悲しさといいましょうか，さが，いわば外交幹部としての弱さなんでしょう。喬冠華という人物はあまりにも周恩来色が強かった。そのために彼は周恩来が病気になり，そして中国政治の潮流が周恩来批判に向おうとしている批林批孔運動，水滸伝批判の中で，あまりにも周恩来色が強かったがゆえに，彼はいわば節を曲げて江青夫人たちに近づいたんです。喬冠華の読みが浅かったといえば浅かったんですけれども，結局そのことが裏目に出て彼自身失脚して大衆裁判にかけられるという運命にあっているわけです。ただ彼自身がずっと外交部の中で実務的な問題を握ってきたということからして，そして喬冠華の今日の失脚にはそういうような特別な要素があったということから考えますと，やはり喬冠華の演説というものは中国の外交政策を知る上で基本的に重視していいテキストだと思います。そして例の1975年に行われた喬冠華演説の信憑性については，私ども十分なテキスト検討を行いまして信憑性を疑わないわけでございます。非常にこまかいところまで検討いたしました。たとえば彼が国連の「ANCARC」について間違った表現をしている。そんなようなこともあえて間違った表現をしていることはむしろ正しいんだということが，テキストの検討をやった上の結論でございますけれども，そのときに彼が言っているのはこういうことなんです。「普通中国で集会があって金日成の名前を中国の指導者が言うと会場がざわつく。それほどまでに金日成

というのは中国の幹部たちにとっていわば軽蔑の対象であり，笑いものにされている人物である」こういうふうに言っています。金日成の名を口に出すと会場の同志諸君は何やら顔を寄せ合って耳打ちしているが，皆さんは彼のことを根っからの修正主義者とでも言いたいのだろうというふうに言いまして，だけれどもそんなことを言ってはいけないというふうにたしなめているんです。結局そのようなことをいろいろ言いまして中朝関係について詳しく論じているわけでありますが，例の崔庸健が北京に来た69年９月の党・政府代表団の問題を取り上げまして，「朝鮮は初めわれわれと親密だったけれども，その後われわれから離れてソ連に近づいた」そして中国から見た場合ですけれども，「ソ連修正主義を国内に氾濫させた。やがてソ連に一ぱい食わされて，彼らはまた小日本の軍国主義復活がこわくなり，さっそく崔庸健を派遣してきた」。だからやむを得ずわれわれはあまり気が進まなかったけれども，周恩来をピョンヤンに派遣してあのような共同声明を行ったんだというようなことを実は喬冠華が言っているわけです。これはもうすでに皆さんご承知のことだろうと思いますけれども，これらの状況から見まして，私が先ほど申し上げましたようなことは基本的に一つの基本構造として言えるのではないか。ですからよく言われているように，大慶油田から北朝鮮にパイプが行っていても，それはたかだか口径30センチぐらいのもので，１日フルに石油が送られても年間大した量にならないんだといわれています。非常にシンボリックな，北朝鮮に対する援助はさしのべていながら，ほんとうのいわば両者の関係，あるいは北朝鮮の経済的困難というものを中国はサポートしようというような気はさらさらないのではないかと思います。その裏返しとしてそれではソ連と北朝鮮の関係はどうかというと，金日成やピョンヤンのことを口に出すとその問題はもう触れたがらないという顔をするわけで，同じことを私は外務省のグロムイコの下にいるソ連極東第一部長のカーピッツァーとじきじきに会って，その問題がテーマではなかったんですが，話したときに，非常に彼はいやな顔をしまして金日成のことに触れたがらない。こういう状況から見ますと，どうも先ほど私が申しましたような構造が中朝関係の中に言えるのではないか。ということは，やっぱりそれだけ中国，朝鮮によるところのコントロールというものがある状況においてはひょっとするときかなくなるという状況の中に北朝鮮があるかもしれないという想定をももたらすような気がするわけでございます。以上はおそらく私などこの問題は素人でございますのでほんのつけ足しであったかもしれませんけれども，あえてお求めいただきましたので一言触れさせていただきました。

どうも長いことご静聴ありがとうございました。（拍手）　　―了―

（文責・編集部）

昭和51年4月8日第3種郵便物認可　昭和52年7月25日発行（毎月1回25日発行）第37号

ISSN 0385-6453

北朝鮮研究

6/7 1977 No.37

国際関係共同研究所 発行

地方組織の人事移動

77年度予算と76年度決算の分析

研究会講演録

華国鋒体制の分析……中嶋嶺雄